



今月の表紙：レヴィ小体の中核を成す蛋白質が α シヌクレインであることが明らかになって、パーキンソン病の病理理解と根本治療への戦略構築は飛躍的に進歩した。当初 α シヌクレインは、レヴィ小体として蓄積する線維に毒性があると考えられてきたが、近年、中間体であるオリゴマーやプロトフィブリルのような多量体に凝集することで神経細胞毒性を獲得することが明らかとなっている。

特集

α シヌクレイノパチーの 新たな展開

97

■鼎談 治療標的としての α シヌクレイン

長谷川隆文 × 下畑享良 × 桑原 聡

107

レム睡眠行動異常症と α シヌクレイノパチー 宮本智之, 他

119

α シヌクレインと家族性パーキンソン病 — 未来への展望

西岡健弥, 服部信孝

131

疾患修飾療法の成功を目指した多系統萎縮症の診断

下畑享良

137

診断バイオマーカーとしての α シヌクレイン 小野賢二郎

143

α シヌクレインを標的としたパーキンソン病の

疾患修飾薬開発戦略 長谷川隆文, 他

総説

151

ペリサイトと神経系 — 生理的役割と病理的意義

清水文崇, 神田 隆

症例報告

159

ステロイド単独治療が奏効した脳原発リンパ腫様肉芽腫症 grade 1 の 1 例 中尾剛幸, 他

連載

166

臨床で役立つ 末梢神経病理の読み方・考え方

第 11 回 薬剤性ニューロパチー 佐藤亮太, 神田 隆

学会印象記

171

Neuroscience 2019 吉川 輝

書評

174

マウス組織アトラス 評者：阪上洋行

175

マクロ神経病理学アトラス 評者：水澤英洋

176

投稿規定

178

Information for Authors

180

バックナンバーのご案内

181

次号予告

182

あとがき